

令和7年度 研究主題

【研究主題】

自ら学び、価値を創造する道徳教育の展開

— 子ども自らが問いをもち、考え方を広げ深める道徳学習の創造 —

【研究の柱】

- I 子ども自らが問いをもち、生活や道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するためのカリキュラム・マネジメント
- II 子ども自らが問いをもち、生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、よりよい生き方についての考え方を広げ深める授業

令和の日本型教育が目標として掲げられ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることが求められている。それは、急速に進化する社会や技術に対応しながら、よりよいものを創造できる「持続可能な社会の創り手」として次世代を担う子どもたちを育てることを目指しているからである。こうした予測困難な社会を生き抜く子どもたちには、自らの課題を発見し解決していく力が必要であり、その力を育むことが急務となっている。こうした背景の中で、道徳教育は重要な役割を果たしており、さらにその扇の要となるのが、「特別の教科 道徳」である。

そこで香川県小学校道徳教育研究会（以下、香道研と略記）では、道徳科の授業において「子ども自身が、主体性をもって自らの生き方・考え方を広げ深める学びを創り出す」ことを核とした道徳教育になるよう研究テーマを見直した。これにより、子どもたちが自己の生き方に関する課題を発見し、深く考察し、多様な他者と対話を通じて解決に導く力を育むことを目指す。

令和6年度までの研究では、「子どもの生活と価値をつなげる」ことに重点を置いて実践した。その成果は、よりよい生き方を求める子どもの姿と、その姿に迫る教師の具体的な手立てが明らかとなつたことだ。しかし、課題としては、子ども自らが「考えたい」と思うような主体性に関わる点が挙げられた。

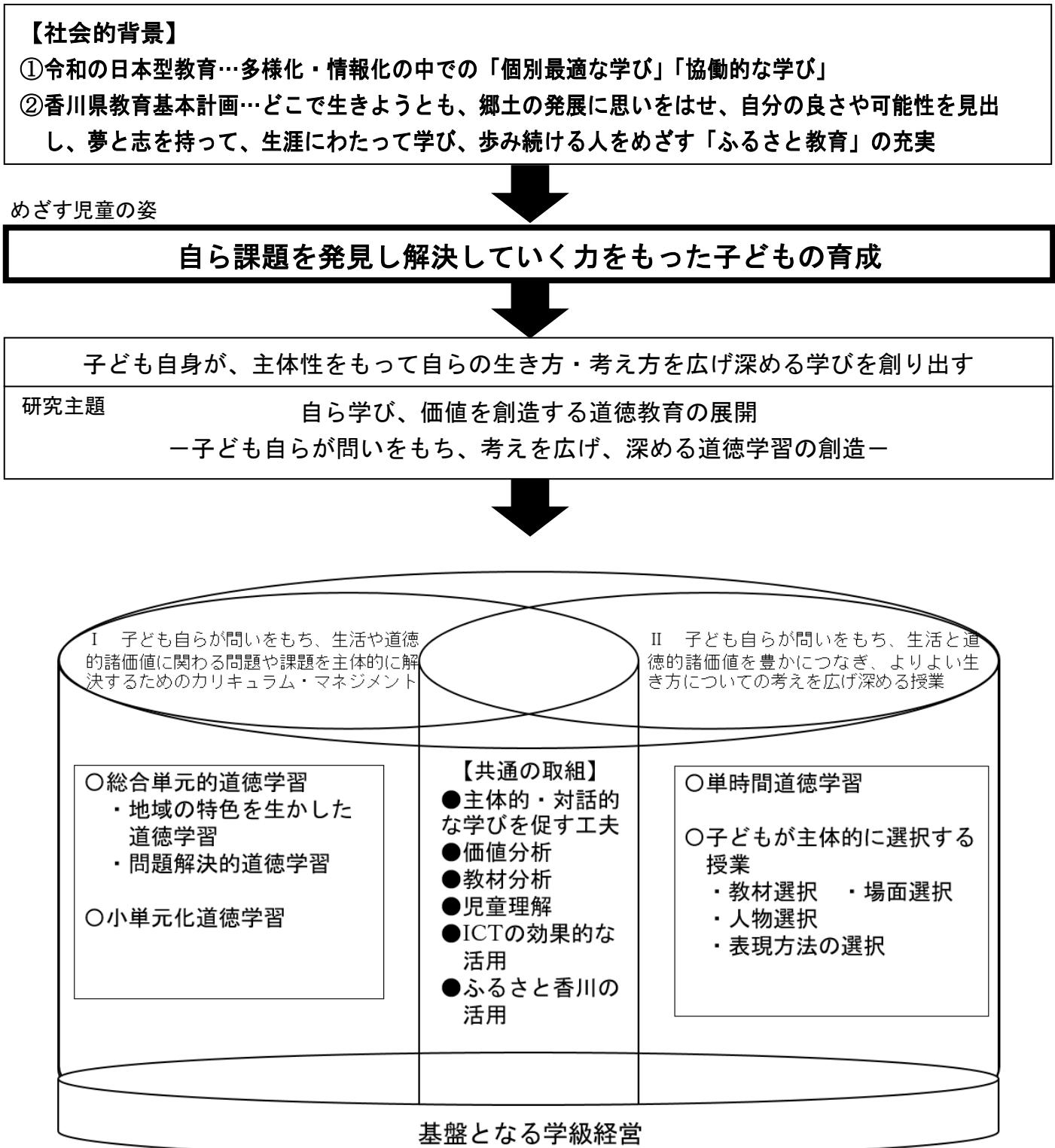
では、主体性を高めるために教師に何ができるだろうか。教師が一方的に道徳的諸価値を教え込もうとしても児童の主体性は高まらない。それより、子ども自身が自ら道徳的諸価値について考え、悩み、話し合うことを教師の仕掛けによって促す方が児童自身の主体性が高まる。つまり、教師にできることは、仕掛け=環境づくりなのである。

そこで、本年度は、研究主題を「自ら学び、価値を創造する道徳教育の展開—子ども自らが問いをもち、考え方を広げ、深める道徳学習の創造—」とし、主体的に自らの課題を発見し、価値について考え方を解決していく力の育成を図る。「自ら学び、価値を創造する」とは、子ども自身が道徳的な問いをもち、主体的に生き方・考え方を問い合わせ続け、よりよい自分を追究することである。言い換えれば、子どもの学ぶ意欲を大切にし、子どもが自らの伸びを確かめ、他者と共に伸びていく学習である。

そのような「自ら学び、価値を創造する」子どもの姿を生み出すために、「自らが問いをもち、考え方を広げ、深める道徳学習」を教師がコーディネートする。つまり、本研究主題で行う道徳学習の主体は「子ども」であり、教師はそれを実現するための環境づくり=道徳教育を展開する。

それに向けた具体的方策として柱を2つ設定した。これまで香道研が大切にしてきた「個を大切にする道徳学習」や「自ら学ぶ道徳学習」などの研究を引継ぎつつ、現代的な課題に対応し、予測困難な社会を生き抜く子どもたちの育成を図る「令和型自ら学ぶ道徳学習」を目指して取り組みたい。

【研究構想図】



各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとめを見通して行うことが求められる。

学習指導要領では、総則第2の2において、以下のように述べられている。

- (1) 各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、Ⓐ各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。
- (2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、Ⓑ各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

（文中一記号・下線部は、筆者による）

また、教育課程を編成するにあたり、教科横断的な視点の考え方については、中教審答申では、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標達成に必要な教育内容を組織的に配列していくこと」としている。このことは、現在の各教科等の関連を教師の「思い付き」で図るのではなく、学校教育目標がめざす資質・能力を育てるよう、意図的・組織的に関連を図る内容を計画的に配列しようとするものである。

さらに、道徳における教科横断的な視点として、学習指導要領解説特別の教科道徳編第2節道徳科の指導では、学習指導の方針・在り方として以下の内容が示されており、その概要は次の通りである。

・多様な教材を生かした学習

①教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて、登場人物に自分を投影して道徳的価値の理解を深めることができる。

・問題解決的な学習

児童生徒一人一人が生きる上で出会うようになる②道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

・体験的な学習を生かした学習

集団宿泊活動などの体験的な学習を生かした授業を工夫して、道徳的価値のもつ意味や大切さについて深く考えることで、生活の中で生じる③様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

（文中一記号・下線部は、筆者による）

道徳科のカリキュラムにおいては、道徳教育の全体計画とその別葉により学校教育目標やめざす子ども像から指導内容の重点化を図るとともに、「総合単元的道徳学習」あるいは「単時間道徳学習」で扱うといった、学習類型も検討し、年間指導計画に位置づけることが大切である。

本研究主題では、上記のⒷ・②・③について「総合単元的道徳学習」「小単元化道徳学習」（研究の柱Ⅰ）、Ⓐ・①について「単時間道徳学習」（研究の柱Ⅱ）、として、位置づけることにする。

研究の柱 I 子ども自らが問い合わせをもち、生活や道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するためのカリキュラム・マネジメント

(1) 総合単元的道徳学習（上記⑧・⑨・⑩）

道徳科の授業をよりよい時間とするためには、学校教育活動全体で行う道徳教育の充実が必要である。子どもたちは、日常的に道徳的諸価値に関わる学習活動や体験を行っているが、それをいかに生かすかが重要である。そのため、教師は意図的に学校の行事や体験、教科等の学習活動等をマネジメントし、道徳科の授業で考えが深まるように働きかけることが大切である。このような考えのもと、道徳科の授業を要とし各教科や特別活動、総合的な学習の時間等と関連をもたせ、意図的・計画的に行う総合単元的道徳学習が広く行われるようになった。特に、総合的な学習の時間と関連をもたせ、環境、福祉、人権といった社会の諸課題や地域の人々の暮らし、伝統や文化など地域の諸課題の解決をめざす道徳学習が定着されつつある。

この総合単元的道徳学習は、子どもの意識の流れを大切にした道徳学習ができるように、単元化を図って行われるものである。単元化を図ることで、価値内容について多様な関連価値から深めることができる。単元内の他の道徳の時間に学んだ価値、総合的な学習の時間の体験を通して気付いた価値をつなげて、自分の新たな価値観をつくることができる。さらに、体験を結び、道徳的実践力をより高めることができる道徳学習である。

問題をもち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
総合的な学習の時間の探求課題から、自己を見つめ、問題をもち、見通しをもつ。	教材により広い視野から多面的・多角的に道徳的価値を探る。	総合的な学習の時間での活動事例（生活事例）により、人間的な生き方について考えを深める。 → 学んだ道徳的諸価値を総合的な学習の時間につなぐ。

表1 総合単元的道徳学習（総合的な学習の時間とつないだ場合）のイメージ

問題をもち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
生活上の課題を見つめ、共通意識をもつ	教材により広い視野から多面的・多角的に道徳的価値を探る。	→ 各教科での活動事例（生活事例）により、人間的な生き方について考えを深める。 学んだ道徳的諸価値を各教科の学習につなぐ。

表2 生活上の課題から各教科の学びにつなぐ総合単元的道徳学習のイメージ

(2) 小单元化道徳学習（上記⑧・⑨・⑩）

また、学級の課題等に応じて、総合単元的道徳学習よりも短いスパンで行う「小单元化道徳学習」も考えられる。「小单元化道徳学習」とは、道徳の授業の前後に行事や学活等の時間を3時間程度で設定し、单元化を図って行うものである。この小单元化道徳学習のよさは、時数が少なく、子どもにとって価値と生活をつなげやすいことである。教師にとっては、より個に応じた指導と評価を行うことができ、子どもの個性や可能性を伸ばす状況をより生み出しやすくなると考える。例えば、基本的生活習慣や社会のルールの定着及び悩みや心の揺れ、葛藤等の解決を目指し、生活の自立を促す学習が考えられる。特別活動と日常の生活とを結んで、生活の基本に大きく関わる基本的生活習慣や社会のルールが価値として分かり、道徳的実践ができるようになると想定される。また、そこから自分の悩み等の解決方法が見出せるように单元を展開していく。つまり、小单元化道徳学習は、多様な生活様式の中で

の基本的生活習慣、規範により柔軟かつ包摂的に応えられる構想である。価値の認識と実生活での実践を繰り返す中で、自己評価をし、自分の価値観をつくり直していくことができると考える。

問題をもち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
生活上の課題を見つめ、共通意識をもつ	生活事例の中で、課題 場面をつかむ。 → 生活事例により、人間的な生き方について考え方を深める。	主として、特別活動等につなぐ。

表3 小单元化道徳学習のイメージ

研究の柱Ⅱ 子ども自らが問いをもち、生活と道徳的諸価値を豊かにつなぎ、よりよい生き方についての考えを広げ深める授業

(1) 単時間道徳学習（上記Ⓐ・①）

総合单元的道徳学習は、意図的・計画的に行われる学校の教育活動とつなぐ学習である。しかし、子どもたちの生活は意図的・計画的に設定されている場だけではない。学校の休み時間や家庭や地域において子どもたちは様々な経験を積み重ね成長している。道徳の教材や価値内容によっては、そのような生活経験とつないでよりよい生き方についての考えを深める単時間道徳学習が効果的なことが多くある。

また、子どもの生活経験とつなぐことが難しい価値も考えられる。例えば、家庭や地域の実態によるが、内容項目であれば「国際理解、国際親善」「畏敬の念」「よりよく生きる喜び」等がこれにあたる。このような価値を単時間道徳学習で扱う。単時間道徳学習では、教科書教材を最大限に生かして、子どもの心に残る指導の工夫を考え、子どもが自ら内面を見つめ、道徳的心情や道徳的判断力を高めていくことをめざす。

問題をもち、見通しをもつ段階	調べ、考え、表現し、まとめる段階	つなぐ段階
教材についての読書活動・感想文から、感じたことに問題をもち、見通しをもつ。	文の読み解き、感じ方を交流し、価値についての見方・考え方を深める。 → 見方・考え方の論理を深め、生活事例とつなぐ。	学習活動や自己の生活とつなぐ。

表4 単時間道徳学習のイメージ

(2) 子どもが主体的に選択する授業

自ら学び、価値を創造する道徳教育の探究をめざす中で、核となるのは、児童の主体性である。いくら教師が教材を分析しようと児童の主体性が高まらない限り、児童の学びは成立しない。できることなら、学級の児童全員が自分の生活経験を呼び起こし、資料に含まれている価値内容と結びつけながら学べる、つまり、一人ひとりの居場所がある授業をつくりたいものだ。その主体性を保障するための一つの方策として、児童が「自己選択・自己決定」することが有効だと考える。

これまで、香道研では、「児童理解」「価値分析」「教材分析」とともに大切にしてきたことに、「操作活動」がある。一人ひとりが授業の中に位置付き、主体性をもって学ぶ授業を展開するには、個々が操作する学習を用いることが有効だと検証してきた。道徳科における操作活動は、「判断力を育てる論理的操作」と「心情を育てる感性的操作」の2つに大別できる。その中で行われるのが「選択」である。場面選択、人物選択など、児童自らが立場や場面を選択したうえで、対話を通じて価値内容について考えを広げて深めていく。香道研では、いくつかの選択肢から自らの立場や場面を決定するということが

自ら学ぶ姿を導くことに有効であると証明してきた。

さらに、児童一人ひとりは、学び方が異なる。例えば、他者との直感的な対話を通して自らの考えを明確にする児童もいれば、他者の話を聞きながら自己内対話を通して考えを明確にする児童もいる。一人ひとりの学び方が異なるにも関わらず、同じ学び方をさせるのは、児童の主体性を奪いかねない。それは、自ら学ぶ児童の姿とは、全く反対の姿が現れる。児童一人ひとりに合った「選択」のできる環境づくり、このことこそ「コーディネーターとしての教師」の役割であり「令和型自ら学ぶ道徳学習」の一手ではないだろうか。

このように、これまで香道研が大切にしてきた「個を育てる道徳学習」を継承しつつ、目の前の児童が自ら学ぶために、児童一人ひとりに合った「選択」のある授業をつくっていきたい。

2つの柱に共通する取組

(1) 児童理解、価値分析、教材分析、

香道研では、これまで「児童理解」と「価値分析」、「教材分析」を大切にしてきた。

まず大切にしなければならないのが「児童理解」だ。児童の実態は、それぞれの学級によって異なる。ねらいとする児童の実態と、構造的にとらえた価値内容とをつなげることにより、児童の多様な追求を可能にするねらいを設定することができる。そのことが、児童の主体的な学び方を促す学習を可能にするのである。そのうえで「価値分析」「教材分析」を行う。「価値分析」は、この主題で何をねらうかを明らかにするものである。中心価値のみならず基底となる価値、関連する価値、発展的な価値など価値構造をとらえることは重要である。なぜなら、中心価値とそれを支える関連価値の関連性と発展性をとらえることで、より児童が主体的に学べるためのねらいが設定できるからだ。「教材分析」は、教材をねらいとの関わりで道徳的価値がどのように含まれているかについて検討するものである。登場人物の行為や心の動き、読み物教材に対する子どもの感じ方や考え方など分析し、どのようにすれば、子どもの学習意欲を高め、道徳的価値の理解を深めることができるかなどについて多面的に検証することが重要である。

	児童理解	価値分析	教材分析
手順	<ul style="list-style-type: none">子どもの発言や行動から道徳的価値における実態を把握する。児童の実態と価値分析とつなげて考えて、授業のねらいを設定する。	<ul style="list-style-type: none">関連する価値を含めて中心価値を主題から何をねらうかを明らかにする。中心価値、関連価値について、子どもの実態や家庭の願い、学校課題と照らし合わせる。	<ul style="list-style-type: none">教材から読み取れる多様な価値を把握して、つながりを見付ける。子どもの感じ方や考え方を想定しておく。
例	生活科での野菜をお世話したことを通して、自然を大切にしたいという心情が養われている。毎日の水やりの際に言葉かけを行っている。	主題「生き物と共に生きる」 中心価値「生命の尊重」 関連価値「善悪の判断、自律、自由と責任」	「ごめんね、みなみ」と人間が捨てたゴミの誤飲で死んでしまったキリンに対する言葉から、動植物を自分事として考えることにふれられる。

表5 各手順と具体例

(2) 主体的、対話的な学びを促す工夫

主体的、対話的な学びを促すためには、考えたくなる、話し合いたくなる必然性を高める「問い合わせ」(課題)の設定が大切である。子どもが受け身になるのではなく、学習に対して主体的に参加できるよう、

子どもたちの興味や関心を基に、一人ひとりの個性に応じた多様で質の高い学びを保障する。

授業づくりでは、子どもが主体的に対話的学習が進められるように「問い合わせ」につながる発問を教師は準備しておく必要がある。中心となる発問だけではなく、補助的な発問やそこに至るまでのしあわせ等、子どもの実態と姿を十分に想定しながら行っていくことで、深い学びへつなげていく。

さらに、交流場面のマネジメントも重要だ。どのように考えを表出させるか、どのように対話を促すか。児童自らが「言いたい」「聞きたい」という学習意欲、「やり遂げたい」「やってみよう」という学習意志の両面からの仕掛けをしていくことが主体的、対話的な学びを促すと考える。

(3) ICT機器（タブレット等）の効果的な活用

令和の時代における学校「スタンダード」として、一人一台端末環境となった。文部科学省の方針の中には、ICT環境の整備は、目的ではなく、手段であることである。このような状況を、道徳の授業づくりに効果的に活用していきたい。そのとき、これまで行ってきたアナログでの良さと、これから時代に求められるデジタルの可能性を適切に合わせていきたい。

ICTの活用により、より一人ひとりの価値観が表出されやすくなり、見方や考え方を広げやすくなることが考えられる。しかし、ここで大切にしたいのは、広げるだけではなくICT機器を児童自らが活用することによって他者の価値観と自分の価値観の共通点や差異点に気付き、道徳的価値を理解し、学びを深めていくことである。

	デジタル	アナログ
導入場面	・アンケートフォームの活用することで、集計の作業をせずに結果を知ることができる。	・子どもの声で生活経験を聞き合うことができる。つぶやいた言葉から新たな話題が生まれることも期待できる。
展開場面	・座標軸での立場を明確化することとその理由を打ち込める。誰がどのようなことを考えて表現しているのかを知ることができる。	・座標軸を用いた議論を行う際には、立場を気軽に変えることは難しい。手動で教具を動かすため、操作と思考を繋げて考えることができる。
終末場面	・学んだことや感想を全体で共有しやすい。友達との考えを比較しやすい。自分で比較対象を選択できるという点においても個別化できる。	・書く活動や発表することを通して、個の思いを声で共有することができる。一つのものを介することで、視点を一つに対話することができる。

表6 これまでの研究で得られたデジタルとアナログのよさ

(4) 郷土資料「わたしたちのふるさと香川」の効果的な活用

香川県郷土教材「わたしたちのふるさと香川」とは、平成30年度より香川県の「ひと・もの・こと」を教材にしたもので、郷土の歴史ある事柄や先人の思いや願いにふれることができる教材である。そして、この教材は故郷となる香川県の知見を高め、郷土愛を育むことをねらいとしている。

香川県では、香川県教育基本計画において教育理念を「郷土を愛し夢と志を持って自ら学び歩み続ける人づくり～自立・協働・創造を支える香川の教育～」と掲げている。さらに、「郷土香川の自然、伝統、文化、産業などへの理解を深めることで、子どもたちの郷土への愛着や誇りを育み、香川で育ったことを人生のゆるぎない礎として、どこで生きようとも、郷土の発展に思いをはせるとともに、人生100年時代を見据え、自分の良さや可能性を見出し、夢と志を持って、生涯にわたって学び、歩み続ける人を、学校をはじめ家庭や地域と連携・協力しながら育成していきます。」と述べている。このことを踏まえても郷土教材「わたしたちのふるさと香川」を用いて道徳的価値と子どもの郷土に対する理解を深め

ることは、有効であると考える。

社会情勢や子どもも周囲を取り巻く環境の変化だけではなく、道徳教育の全体計画を立案するに当たり、子どもにとって身近であり、考えを深めていくことが重要である。その有効な手立てとして、郷土教材の活用が挙げられる。教科書教材と比較しながら、子どもの実態に応じて年間計画を作成することで、より子どもが主体的に学ぶことにつながると考える。学校行事や地域のイベントと照らし合わせながら、進め方について具体的に示し、教職員の共通理解を図ることが大切である。

特に、生命や自然、伝統をはじめとする先人から学ぶ道徳的諸価値を含む内容に関しては、郷土教材「わたしたちのふるさと香川」に多く取り扱われている。香川県での実際に起こった出来事をもとに作成されているため、子どもが身近に感じながら考えを深めていきやすい。また、学校によっては実際にその場所や人が近くに存在し、実際につながることで本物と関わりながら学習を進めていくことも考えられる。例えば、令和8年度改訂版で導入予定の新規教材の題材となる「香川県独立の父中野武昌」は、玉藻公園に銅像が設置させたことから「どうして銅像を建てようとするのか」と問えば地域の人の思いを想像できる。また、「武昌さんは、どうして苦労してまでも独立を目指したのか」と問えば、独立に向けて熱心に活動した意志や愛を学ぶことができる。それが、自分たちの地域の偉人であれば効果は絶大である。教材性と地域性を有効活用していくことで、児童が、より自分事となつた「問い合わせ」と「気付き」を求めていけることにつながるのである。本年度の実践を基に、今後も、新たな教材開発も念頭に置いて進めていきたい。

○おわりに

これまで述べてきたように、本年度は2つの柱をもとに、研究主題に迫ることを取り組んでいきたい。香道研がこれまで大切にしてきた「個を育てる道徳学習」「自ら学ぶ道徳学習」を継承しつつ、現代の目の前の児童の実態に即した「令和型自ら学ぶ道徳学習」と追及していく。その際、目の前の児童の変容を姿とノート等の表現物を比較し、事実を成長と捉えて研究の検証を行っていく。

予測が困難と言われている時代であっても、道徳的価値の理解を支えとし、自ら多様性を認めながら個性を發揮し、しっかりと判断していき、人生を歩んでいける子どもの育成を目指していく。より香道研の道徳教育を充実させるためにも、県下の先生方による実践を分析し研究の方向性を見据えていきたい。

【参考文献】

香川県小学校道徳教育研究会（1991）『子供が自ら学ぶ道徳教育－体験を生かした道徳授業の展開－』
東洋館出版社

香川県小学校道徳教育研究会（2024）「わたしたちのふるさと香川」文教社

香川県小学校道徳教育研究会（香道研）の出版図書・主な研究物 書名	出版社	出版年月
『道徳授業の構造化』	明治図書	昭和44年9月
『個を育てる道徳授業』	明治図書	昭和50年7月
『発達課題にもとづく道徳教育』	明治図書	昭和58年10月
『子供が自ら学ぶ道徳教育－体験を生かした道徳授業の展開－』	東洋館出版社	平成3年8月
『新・道徳学習の理論と実践－総合単元的な道徳学習の展開－』	松林社	平成7年10月
『「生きる力」を育む道徳授業－道徳を柱とした総合的学習・道徳授業の活性化の実践－』	松林社	平成10年9月
『総合的学習と連携を図る道徳学習－新教育課程の構想と実践－』	明治図書	平成11年10月